

Sekiya Kanako



関谷 佳那子さん

高島小学校6年生

せきや かなこ / 物心つくころから農業に慣れ親しんで育ってきた。おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に自然に囲まれた田んぼに出て、「野まわり」をするのが何より楽しいという。絵を描くほかに、書道やレスリングなどでも活躍している。

鳴き声はもう聞こえない

生まれたときから、慣れ親しんだ牛たちの鳴き声は、もう聞こえない。かつてのようなら、にぎわいのなくなってしまう牛舎。その建物だけは、今も静かにたたずんでいます。



ひっそりと静まりかえった牛舎

最後に関谷さんに将来の夢を聞いてみると、「大好きな、おじいちゃん、おばあちゃんのような農家になりたいです」と元気いっぱい答えてくれました。

「我が家の牛舎 最後の夏」

ふるさと水と土優秀賞受賞作品

牛舎の牛たちはどことなくやせて、さみしそうだ。ドナドナのメロディーが頭をよぎった絵である。絵のタイトルを知りさらに考えさせられた。ネコも奥で作業するおじいちゃんの背中もどこか哀愁を帯びている。優しい気持ちの作者なのだろう。淡い色ながら、タイトルにある最後の夏の状況を描き、懸命に訴えかけているかのようだ。作者の人情がにじみでている。 — 審査員の講評より —

家族同然の牛たちやふだんと
変わりない我が家の情景を
ただ描きたかった。



急になくなってしまうことになったのです。この作品は結果的に牛たちを描いた、最後の一枚となっていました。 「作品は夏休み中、少しずつ描いていきました。でも、牛たちはわたしが学校に行っている間に、引き取られて行ってしまいました。夏休みの後、おじいちゃんとおばあちゃんは、孫に見せないように牛たちを引き取ってもらいました。牛たちは家族をみんな分かっていました。だから、別れの鳴き方は、ふだんと違って聞こえたそうです。 「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の作品は、どれも田んぼ

の風景などの作品が多い中、こういった作品が入選するのは異例。作品中のどことなく悲しそうな牛たちの瞳が、審査員の胸を打ったのかもしれません。

農家になるのが将来の夢となった

酪農を営む家に生まれ、牛たちの鳴き声を予歌がわりに育ってきた関谷さん。物心つくころからずっと見てきた情景を、「我が家の牛舎 最後の夏」という一枚の絵画作品に込めました。

何より田んぼや生き物が大好きで、おじいちゃん、おばあちゃんの農作業風景を題材にした作品を数多く描き、これまでも入選を果たしてきましたが、今回の作品はその中でも一番大切な作品となるはずです。



描き残したい情景が
この家にはあった

「わたしは、家族同然の牛たちが大好きでした。生まれ育った家の、それもいつもと変わらない情景を描いただけです」と話す関谷さん。作品には、幼いころから慣れ親しんだ牛たちや作業をする、おじいちゃんの後姿、大好きな

ネコの「ロン」など、ふだんと変わらない生活の一面が描かれています。

関谷さんのお宅は、農家を代々営む家庭。戦後間もないころから酪農を営んできたといいます。ところが、2011年の夏、長い間続けてきた酪農に幕を閉じることになったのです。牛たちの鳴き声、作業をするおじいちゃんの姿、それまで見てきたいくつもの営みが

審査員が称賛した
水彩画 作品



自分の大好きだった情景を
伝える最後の作品となった

高島小学校6年生の関谷佳那子さん(石打・20区)が、「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展2011(全国水・土里ネットなどが主催)で「ふるさと水と土優秀賞」に輝きました。応募総数10,807点の中から入賞。関谷さんは、2008年の入賞以来、4年連続入賞を果たしています。

「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展2011で
関谷佳那子さんが優秀賞に輝く!